



縁

信州大学理学部の巽広輔先生よりバトンを受け継ぎました同学部の高橋史樹と申します。大学院での学生生活を満喫していたところ、巽先生が本講座に着任され、さらに楽しい日々を送ったことが思い出されます。修了後に、学外で勤務した後、再び本学に戻り、巽先生とともに学務に従事させていただくことになり、つくづく「縁」というものの不思議さを感じている次第です。エッセイの作成は初めての経験で、拙い文章ですがお付き合いいただければ幸いです。

現在、巽先生より絶滅危惧種と称された分析化学講座にて教育研究業務に従事し、毎日が四苦八苦しつつも楽しく生活しております。その中、巽先生がある教授のご退職記念式典で「退職記念とは、どれほどお目出たいのだろう…」と思っておりましたが、実際に大学で働くと、確かに定年まで勤めあげられるのは実にお目出たいことです。」と述べられたのが大変印象的でした。職場としての大学生活に慣れていなかった頃のお言葉でしたが、大学の教員は皆、頑張っているのだと改めて認識できた瞬間でした。その学務に従事することの難しさについて、どう克服、改善していこうかとしていた中、昨今の世界的なコロナ禍という大きな事態に直面し、教育研究に大きな影響を受けました。研究への影響については、本稿をご高覧の皆様が肌で感じているところと拝察いたしますので、教育部分のうち、先日行った研究発表会の様子について、本学部学科の紹介を含めて紹介させていただきます。

本学部では必要な基礎知識を修得・卒業研究へと集約しつつ課題解決能力を身につける標準プログラム、専門分野でのより深い知識に裏付けされた研究力を身につける先進プログラム、並びに幅広い基礎知識に裏付けされた応用能力の醸成に基づく学際プログラムによる三つの教育プログラムが設定されております。本職が所属する化学コースでは4年次の学部学生は教員研究室にそれぞれ配属され研究に取り組む、または学際プログラム過程の講義を受講することで卒業に向けて励んでおります。前述のとおり、令和2年度は授業および研究室の活動を大幅に変更することを余儀なくされ、学生は息の詰まる思いであったかと思えます。しかし、研究室への限られた滞在時間で効果的に実験を行うための準備・段取りをしている姿をみると、昨年度までのなんとなく研究室に在室している時間よりも相当に有意義であり、学生が成長していることを感じます。好ましくない状況下においても何事も経験することの重要性を実感しているところです。話は逸れますが、本職は以前、土木建設の現場で作業員として従事しておりましたが、社長から常日頃から「段取り八分」と口酸っぱく言われておりました。準備を十分に行えば仕事の大半は済んでおり、ここに実際の工事中で新しい工法を発見できれば喜ばしいこと…と体で教えられました。この心がけは現在の生活にも繋がると考えており、新しい工法の部分を分析化学法の発見に置き換え、セレンディピティを信じて研究活動を行っているところであります。

卒業および修了研究、並びに学際プログラムでの学生生活の集大成として、発表会で披露することになるので



写真 修士論文発表会の様子。この学生さんの発表の一部は先日 Analytical Sciences に掲載していただきました。10 営業日以内の丁寧な査読、その後の受理のご連絡の後、1 週間で公開の手続きをしていただきました。迅速で大変丁寧な対応をいただきまして、深く感謝申し上げます。

ですが、本年度は講義室とオンラインの同時中継によるハイブリッド形式で執り行うこととなりました。昨年度までの対面形式の発表会に、そのままオンライン配信のシステムを追加することになるため、単純に作業が増えました。幸い、パソコン、カメラおよびスピーカーは学部の全講義室に配備されており、オンライン配信の設定を行うことが中心かなと考えておりました。しかし、オンライン上に発表者ごとにアップロードされた要旨用データを取り纏め（体裁崩れなどの修正に時間がかかり、討論会・年会の登録方法のスマートさに頭が下がる思いです）、オンライン会場の設定・周知、聴講者へのアナウンス、セキュリティを含む情報の取り扱いをどの範囲まで厳密にするかを教員間で相談するなど、もろもろの作業が待っておりました。何とか段取りした後、今度は本番の発表会となりますが、マイクとスピーカーの設定を切り替え忘れて、一部の発表が極端に聞こえにくかったり、ハウリングしてしまったりしてドタバタしてしまいました。とはいえ、何事も経験で秋季卒業、2月の修士論文発表会および卒業研究発表会と回数を重ねるうちに段取りのノウハウが掴めた感じがしております。おそらく、このような形で今後も発表会を行うこととなりますが、意外に学生さんの反応は悪くなさそうで、「縁」の最たるものである学生さんのため、やれることはやろうと思った次第です。

本講座には3人の教員が在席しております。その内のお一人、金継業先生は学生時代から公私を問わずご指導・ご助言をいただいた父親とも言える恩師であります。長い「縁」としてお付き合い(&お手数、ご迷惑…?)させていただいておりますが、本分析化学講座の締めとしてバトンをお預けします。お顔が広く、様々な方面で「縁」を大切にしておられる金先生、宜しく願い致します。

〔信州大学理学部 高橋史樹〕